



工場内の風景

精密プラスチック製品の開発・製造

株式会社
横井製作所国内生産にこだわって
特色を持った製品作り

主な事業内容

精密プラスチック射出成形部品の製造

主な製品

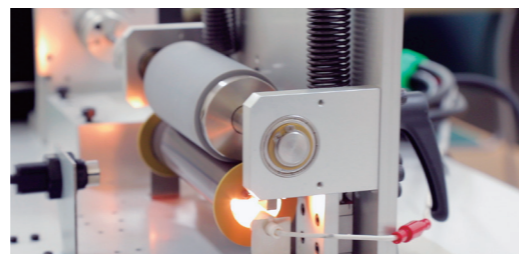
複写機トナー内の攪拌スクリュー



製品の写真



管理職の約3分の2が女性だ(オフィス内の写真)



社内評価の様子

事業内容と沿革 国内生産にこだわり

精密プラスチック射出成形部品を製造する。国内の複写機メーカーのほぼすべてと取引を行っているほか海外メーカーにも納入を広げていて、特にA3カラー複写機の樹脂製トナー内部の攪拌スクリューでは世界シェア約20%を獲得している。

昭和59年に横井慎一社長の父である横井洋治会長が創業。一部上場企業に金型や成形品のアドバイスをしたことが縁となり取引先になるなど、第一期目から黒字経営を実現してきた。その後、1990年代にはコスト対策から海外生産を要望されることもあったが、国内生産にこだわり特色をもった部品の生産に力を注いできた。

材料メーカーと協力して行う材料開発から始まり、ミクロン単位の加工を施す「金型設計部門」、自動ロボットやIoTの導入が進む「成形技術部門」、取引先に新技術などを提案するための「社内評価部門」で強みを形成する。

強み

絶対他社が
真似できないものを作る

材料から絶対他社が真似できないものを作るという基本戦略のもと、海外の安い製品との差別化をする。材料メーカーと協力して、取引先へ各部品に対する最適な材料や特性の提案を行う。例えばキロ当たりの材料コストを数分の1にしなが、取引先の求める性能を確保したり、上回る機能を持つ部品を作るといったことだ。

同社が扱うプラスチックの射出成形向けの材料には100数十もの種類があるとされる。これらの組み合わせによってどのような特性を持つ部品ができるのか、その評価データを取引先に示すことができるので、今では取引先の新製品などの設計・開発段階から相談を受けるまでになっている。そして、自社で金型を作っているため、急に試作品を作って欲しいと頼まれるような場合にも対応が可能だ。

プラスアルファの価値を創造していく

取引先とも互いに「対等の関係」であることを大切にしてきましたが、それと同じ様に従業員にも「人を大切にする」企業でありたいと思っています。今後はインターンシップにも力を入れます。新しい人とも家族的な社風を保ちながら価値観を共有していければと考えています。

代表取締役社長
横井 慎一さん

問題解決しなければ
本質を見なければ

住所	〒611-0043 京都市宇治市伊勢田町浮面28-1
TEL	0774-41-2681
FAX	0774-41-2516
創業	昭和59年4月
設立	昭和60年4月
資本金	1,815万円
従業員	105名

<https://www.yokoiss.com/>


このほか工場は射出成形品の取り出しなどにロボットを多用しているほか、令和3年10月には検査工程を自動化している。また24時間稼働する工場の、特に夜間作業中に起きるトラブルを無くするためにIoTを導入してデータの収集にも努めている。そうして稼働率を7割程度に収め、取引先の急な増産の要請にも即時に対応できる。

同社では平成23年から全社挙げて節電にも取り組んでいる。その一つが樹脂成形の際に樹脂材料を熱風で乾燥させて成形不良をなくするための乾燥機に、排気熱を循環利用させていることがある。また、照明をLEDに代えたり、タンクで貯めた雨水を利用して屋根や室外機を冷却する。25年にはソーラーパネルを設置。そして、令和3年には工場の天井に断熱材を入れ、断熱効果を高めた。国連がSDGs(持続可能な開発目標)を採択する前からのこうした取り組みは、これからの社会に不可欠なものとして企業間取引の大前提にもなろうとしている。

今後の展開

サビ対策にプラスチック

同社は今後も工場の「スマートファクトリー化」に力を入れていく方針だ。工場は今、24時間稼働しているが、特に「深夜勤務を無くしていきたい」と横井慎一社長は話す。同社の本社工場は、平成20年にでき、令和元年には増改築したばかりだが、その後も機械設備が増え続けていて手狭になっており、増産のための対策も早晚必要になると見られている。

「目先のことより次の世代のために何ができるかを考えて行動していこう」と社内に呼び掛けている横井社長。今はプラスチック射出成形部品の新しい用途開拓も佳境に入っている。その一つとして、高速道路や橋梁などの社会インフラの老朽化が問題になっているが、その原因の一つとされるサビの問題に対して、プラスチック部品の開発を進めている。この実用化も間近にあり、その普及に向けて業界の内外から大きな注目を集めそうだ。